

特集 ■ 文化施設におけるVR～望まれるもの、課題と展望

実際に展示に携わった研究者の展示に関する考え方 (3)

「多元的デジタルアーカイブズ」シリーズと今後の展望



渡邊英徳

首都大学東京

Watanabe Hidenori

1. 多元的デジタルアーカイブズ・シリーズ

筆者らは、多角的なデジタルアーカイブ群をマッシュアップしVR-AR インターフェイスに一元表示する「多角的デジタルアーカイブズ」を提唱し、これまでに様々な題材をテーマとしたアーカイブズ・シリーズを制作してきた。公開されたアーカイブズにはこれまでに全世界から累計60万件以上のアクセスがあり、各種コンペティションで受賞するなど、一定の評価を受けている。

2. アーカイブズ・シリーズの社会的ミッション



図1 ツバル・ビジュアライゼーション・プロジェクト
*口絵にカラー版掲載

シリーズ第一作「ツバル・ビジュアライゼーション・プロジェクト(図1)」(2009年)は、筆者と、ツバルの支援活動を行なう写真家、遠藤秀一氏との出会いからスタートした。当時は「ツバル=地球温暖化による水没に瀕する悲劇の国家」といった報道が一般的であった。しかし遠藤氏は「まずはツバルの人々の顔をみて、言葉を聞いて欲しい。温暖化や海面上昇の話はそれから」と述べられた。この対話とその後のアーカイブズ制作を通して「通念、偏見や先入観を越えたありのままの姿」実相を伝える」そして「実相を語り継ぐコミュニティを形成する」というミッションが醸成されてきた。

3. VR-AR インターフェイスの実装

これらのミッション達成のために、データ群とユー

ザコミュニティをマッシュアップしてデジタル地球儀上に表示するVR インターフェイスと、スマートフォンのカメラに情報を提示するAR インターフェイスが実装された。これらを用いることで、同一のアーカイブズ・データベースから、仮想空間と実空間の双方に情報を提示することができる。このことにより、例えば旅行者が、VR インターフェイスを用いた「事前学習」を行ない、旅先ではAR インターフェイスを用いた「現地学習」を行なうといったスキームが実現する。本稿執筆時点において、沖縄県と長崎県による事業が実施中である。

4. 現状と今後の課題

アーカイブズは「完成」することはなく、それを取り巻く人々のコミュニティとともに成長していく「記録の連続体(レコード・コンティニューム)」であるとされる。筆者らが手がけたもののうち、有志により制作がスタートし、ボランティアに運営されてきたものは、細やかなアップデートとフレキシブルな活用が行なわれてきた結果、この理想形に近い「成長するアーカイブズ」となっている。一方、アーカイブズ・シリーズの事業規模は徐々に拡大しており、コンテンツとしての完成度が向上した反面、制作時や完成(納品)後の運用における自由度が低下したことにより、理想から遠ざかっているとも言える。事業主体や規模に影響を受けることなく、理想的な「成長するアーカイブズ」を制作・運用しつづけることが、筆者らの今後の課題である。

【略歴】

渡邊英徳 (WATANAVE Hidenori)

首都大学東京 システムデザイン学部 准教授

ネットワークデザインを研究。

ウェブサイト URL: <http://labo.wtnv.jp/>